

農業土木を 支えてきた人

北海道幌向原野開拓の祖 辻村直四郎

野 沢 啓 治*

I. はじめに

北海道の歴史はきわめて新しく、昭和43年に開道100年を迎えたにすぎない。とはいえ松前を中心とする道南は数百年の歴史をもち、また全道の沿岸地域は漁業と北辺の防備を目的として、幕政時代から開かれていた。

しかしながら内陸部は密林と湿地におおわれた未開の地であり、わずかに先住民族であるアイヌ人たちが通うのみであった。今でこそ北海道の中心として発達している空知、上川地方も、明治の初期まではまったくの原野で地名すらもなかった。明治17年(1884)、大蔵省発行の「北海道志」をみても、「人民未タ殖セス暫ク此区ニ附ス」とあり、村名すらもなく、わずかに郡名を記しているにすぎなかったのである。

このあたりに開拓の斧が下ろされたのは明治の中期であり、せいぜい100年にしかない。そのような背景のもとに空知地方の中心都市岩見沢市志文開拓の祖、辻村直四郎を紹介するとともにその業績についてふれてみようと思う。

II. 馬追原野の開拓

辻村直四郎は明治2年(1869)、神奈川県足柄上郡吉田島村(現開成町)の農家に生まれたが、13才のときに父を失い、15才で長兄に死別したので、次兄とともに農業に励み、そのかたわら夜は塾に通って漢籍を学んだ。20才にして勉学の志やみがたく、親せきの援助を受けて東京農林学校(東大農学部的前身)予備校に入学したのであった。

余談になるが辻村一族には学者が多く、地質地形学者であり東大名誉教授の辻村太郎(1890～)、鳥類学者として著名な内田清之助(1884～1975)らも直四郎の従弟であり、そのほかにも学者を輩出、辻村家は学をもって

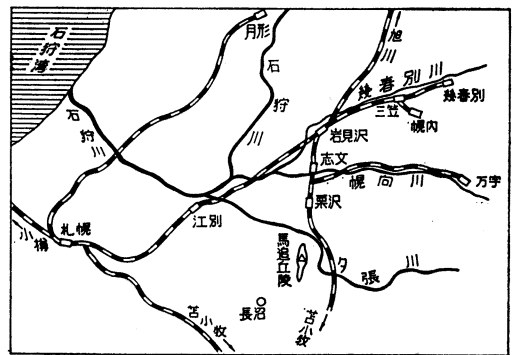


図-1 岩見沢周辺

立つ家系といえよう。直四郎が努力勉学の人であるのもまた当然のことであろうか。

こうして学問を続けたものの彼は学者や役人の道を選ばなかった。彼の野望は農業経営にあった。だがささやかな自作農の四男に生まれた彼には作るべき土地はない。けれども北海道には広大な未開の地が広がっている。そのことが彼をしてさいはての見知らぬ大地へ向かわしめる動機となったのであった。

明治24年(1891)春、彼は学校生活にも見切りをつけ、大きな夢を抱いて渡道した。弱冠22才、単身渡道した直四郎は、毎日のように道庁に通って土地の貸下げを願ったが、そう簡単に貸下げてもらえるものではなかった。

道内いたるところ未開の大地も、すでに貴族、財閥、有力者の所有地になっているところも多く、また高官や有力者の紹介でもあれば親切に貸下げをあっせんしてくれるというわさもあった。だが彼のように何の縁故もない一介の若者には役人も相手にしてくれない。目の前に広大な未開の原野を見ながらどうにもならず、彼は歯がみをする思いであった。

そうするうちに彼の知人の所有する未開地馬追(まお

* 北海道積水工業(株)(のざわ けいじ)

い) 原野の開墾を委嘱された。無為に過ごすよりはこの仕事を請負った彼は、数人の農夫をひきつれ、その責任者となって原野を伐り拓いていったのである。

この馬追原野(現夕張郡長沼町)の開拓については、直四郎の長女である、作家辻村もと子が書いた小説「馬追原野」に詳しく描かれている。もと子は父をモデルにして「大地の底から何かにつきあげられるような想いで…」(著者あとがきより)この作品を書きあげたのであった。そして昭和19年(1944)、「馬追原野」は第1回樋口一葉賞(女流作家に与えられる賞)を受賞、すぐれた作品であることは当然であるが、開拓期の状況を知るための貴重な資料でもある。

学校時代から創作に親しみ、この受賞によってますます将来を期待されていたもと子であったが、惜しくも病を得て昭和21年(1946)、郷里岩見沢志文の実家で永眠、ときに40才。

今、稔りゆたかな水田となった馬追原野を一望のもとに見下す馬追山の頂には、もと子をしのぶ文学碑が建てられている(写真-1)。

III. 幌向原野に入植

直四郎が馬追原野の開墾に従事して1年後、知人から売地を紹介された。それは道庁の役人が他人名義でとっておいた土地であった。無償で貸下げを受けた土地を有償で譲ろうというのである。彼が道庁にお百度を踏んで貸下げを願っても受付けてもらえなかったことを思いあ

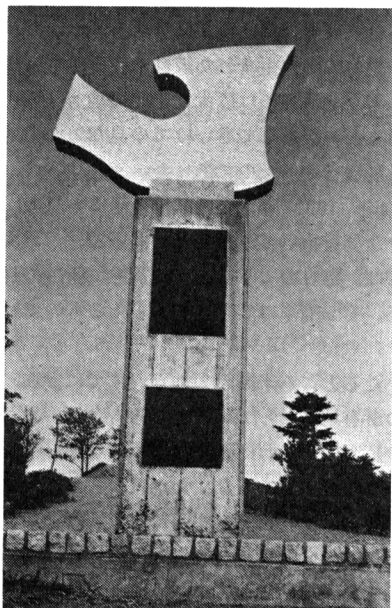


写真-1 辻村もと子文学碑

わせると憤慨にたえなかったが、他に求める方法もなく、それに新しい土地の大きな魅力には勝てず求めることを決心したのであった。

この幌向原野の未開地は130町歩(約130ha)の規模で380円である。だが彼にその資金はない。やむなく親せきから借りたが、もちろん彼にそれだけの信用があったからである。こうして直四郎はついに土地を手に入れた。

明治25年(1892)5月28日、この日は直四郎の生涯のうちで、もっとも思い出の多い記念すべき日であった。朝早く農具や家財を古ぼけた馬車に積み込み、やとった男1人を連れて札幌を発つ。豊平、白石(現札幌市)を経て江別を過ぎると、まったくの未開地つづきで人通りもなく深林のなかの一本道であった。たそがれのせまる岩見沢で、米やみそ、勝手道具などを買いととのえて、ようやくのことで目指す幌向原野にたどりついた。46kmの行程であった。

運よく幌向川の川ばたに道路工事のときに使った掘立小屋が残っていたので、ひとまずここを当分の我が家に利用することにした。

さっそく人夫や馬を手配し開墾にとりかかる。はじめは人も馬もともに不慣れでうまくいかなかったが、慣れるとともに2頭びきで1日30aはできるようになり、仕事はどんどんはかどっていった。

仮りの我が家は、枯草を下敷きにしてその上にむしろを敷いたのが座敷、いろは丸太を囲っただけ、手作りの自在かぎを吊り、火ばしは細い木の枝、下駄は柳の木で作る、まないたもありあわせのもの、大小のなべと鉄びんが炊事用、1枚の皿と茶わんが食器のすべて、はしは熊笹を用いるという生活であった。

さいわいにも幌向川の水がきれいであつたので井戸を掘る必要はなく、入浴はもっぱら川のなかで行水である。主食は岩見沢で買ってきたが、副食は山野に豊富で、季節には鴨や小鳥を獲って賞味した。

新墾とまきつけが一段落するといよいよ我が家の新築である。とはいっても材木は林から丸太を伐りだしたもの、屋根や壁は原野から刈りとった萱(かや)を用い、釘は使わず湿地に生える菅(すげ)をないあ寄せたなわを用いて固定した。もちろん大工もないからすべて自給自足で建てたのである。家の半分は馬屋にあてたところ、馬が壁の萱を食うのには困ったという。

さて初年度はそば7~80俵を収穫、やとい人1人を残し2人で冬ごもりに入る。大した仕事もないからいたってのんびりしたもので、やとい人にまき切りをまかせ、彼は狩猟に没頭し、うさぎやきつねを獲って過ごした。

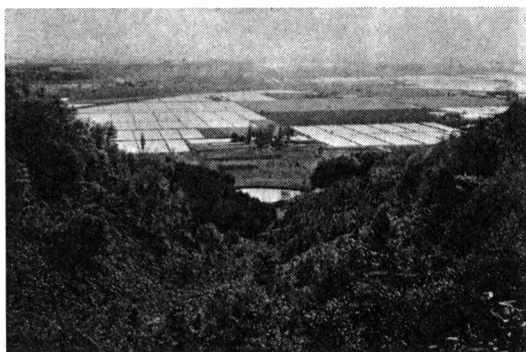


写真-2 豊かな沃野となった志文周辺

開墾のなかでも森林を伐り拓くのがもっとも苦労である。まともに作業をしては容易でないで枝を打ち払って焼いてしまい、幹はそのまま放っておいて2年目以後に焼くか、あるいは幹のまわりの樹皮を切りまわして立枯れにし、根元から火をつけて焼いてしまう。とにかく大木は急いで伐り倒すより朽敗を待つのである。

入地して2年目(1893)からは穀類や豆類のほか、いろんな野菜も植えたので食生活も豊かになった。自家製のうすときねで麦や粟をついて食べたり、麦からこうじを作り大豆を煮てみそも作った。

主食は麦であるが、そのほかに粟飯、小豆のくず飯、きび飯、金時豆飯、とうきび飯などを作って食事に変化をもたせるようにもした。

正月には、もち粟、もちきびについて餅を作る。みその雑煮のなかには鳥肉やうさぎの肉などを惜し気もなく入れたので、労働後の空腹時には美味この上なであった。これらは直四郎の語った開拓初期の生活のひとつである。

IV. 「志文」の名付け親

3年目の春から直四郎は資金をもたない移住者を小作人として林中の湿地の開墾に着手した。そのころからの周辺にも人家が増え、粗末な草小屋ばかりではあるが活気ある村落を形成してきた。

そこで彼は移住者の教育の必要性を痛感し、付近の住民から資金と労力を集めて簡単な50㎡くらいの校舎を作った。住職を教師とする寺小屋式の学校であったが、その後校舎を改築して正式の分教場となり村役場に引継いだのである。

彼の入植した幌向原野にはまだ決まった地名もなかった。役所に地名をつけるように願ったところ、「それはあなたが名をつければよいだろう。だがアイヌの名称があるならばそれを尊重するように」とのことである。

そういえば、このあたりの小川を「シュブンベツ」(うぐいのいる川の意という)と呼んでいることから、「ベツ」を除いて「志文」(しぶん)と名づけることにした。役所でもそれを採用したので、ここに正式の地名が決定したのであるが、自分で地名をつけるとはいかにも初期の開拓者らしい話である。

この命名について直四郎は、「自分は農を志したが、子供の1人くらいは文に志してほしい」という願いをこめたといわれているが、その志を長女もと子が継いだといえよう。だが彼はそのころはまだ独身であり、妻をめぐったのはずっと後年である。

ではここで、彼直四郎の挿話の一つを紹介しておこう。彼はその当時、道庁などに用事があって札幌へ行くときは急用でもないかぎり、にぎり飯を持って往復とも歩くのが常であった(往復約90km、幌内、小樽間の鉄道は1882年すでに全通していた)。

ある日、必成社農場(幌向原野の一部、現空知郡栗沢町)の監督西田市太郎(注参照)と同道して札幌へ行くことになった。岩見沢からは鉄道があるので彼は西田に「わたしは歩いて行きます。午後2時までには着きますから、君は先に汽車で行って自分の用事をすませて下さい」といったところ西田は「歩くのはいいことです。わたしも一諸に歩きます」というので歩きだした。だが線路づたいに江別までくると西田の方はかなり疲労のようすである。気の毒になってとうとう江別から汽車の乗ってしまった、ということである。

(注)西田市太郎(1872~1968)

天香と号す。宗教家、滋賀県長浜出身、1893年開発会社必成社を創設、移住者を集めて幌向原野の一角(現空知郡栗沢町)の開拓につくす。

だが1899年、新しい事業に失敗、その責任をとって引退、故郷に帰った後、1905年、京都鹿ヶ谷(その後山科に移った)に一灯園をひらいた。一灯園は無所有、無一物のざんげ奉仕の生活に基づき、「光明祈願」を主旨とする修養団体である。

天香は戦後、参議院議員もつとめた。

V. 偉大な開拓者

辛苦数年、大半の開墾を終えた直四郎は、なお広く海外に農業の知識を求めてアメリカに旅立った。明治32年(1899)、30才のときである。今から80年もの昔、さいはての国北海道から農業実習のために、遠いはるかな国アメリカに渡ったとは、さすが直四郎はたんなる開拓者ではない、広い視野と新しい識見をもった偉大な開拓者であった。

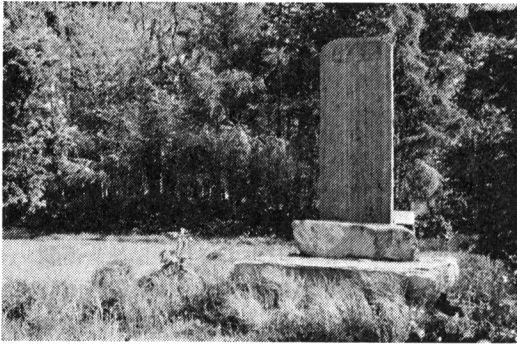


写真-3 辻村農場自作農創設記念碑(背後は辻村家の森)

行先はカリフォルニア州のサリナス地方のキャストロビルである。そこでビートなどの請負耕作や日やとい労働に従いながら、農業の研究に没頭し、明治37年(1904)に帰国した。

彼がアメリカで学んだことは、

- (1) 文化的な生活を楽しむためには、その費用を生み出すだけの努力をせねばならない。
- (2) アメリカの農夫の労働は能率的で、作業を始めると雑談もせず、たばこものまず仕事に専念する。それに反して日本の農夫は、畑にくるとまず一服、仕事にかかるとまもなく雑談、遊んでいるのか働いているのかわからない。

すなわち彼は農業の生産性の向上によって、生活水準の向上を目指すべきことを痛感したのであった。

帰国した直四郎はその年に結婚、彼35才であるからかなり晩婚であった。梅路夫人は同郷小田原の大地主の娘であり、作家中村星胡の妹にあたる。女流作家辻村もとの誕生もまた当然かも知れない。

VI. 森の西洋館

辻村家の邸宅は150aの広大な森のなかにあるが、この森は原始のままに残され、樹令500年のハルニレの巨木や、ミズナラ、センノキがうっそうとして空をおおい、開拓当時の姿を今に伝えている。

人が手を加えて作りだした見事な庭園や、美しい森はたくさんあるが、下草も含めてすべて原始の自然そのままの森に居をかまえるとは、なんとぜいたくなことであろうか。



写真-4 森の西洋館

大正の末、道庁主催の屋敷林の品評会で特賞を得たというが、全国他に類を見ない唯一の住宅原始林であろう。また学術的にも貴重で、道の天然記念物に指定されている。

邸宅は大正2年(1913)の建築であり、その後、部分的に改築されているが、特色ある洋室の部分はそのままに残されている。それはアメリカから帰国した直四郎が、洋風の感覚をとりいれて造ったものといえよう。岩見沢の片田舎志文に建つこの邸宅は、ひととき異彩を放ったにちがいない。人々はこの邸宅を「森の西洋館」と呼びたてたのであった。

開拓者として成功した直四郎は志文の開祖として巨万の富を築き、「志文の殿様」と敬われた。しかしその生活はきわめて質素で、旅行をするときも3等車(鉄道客車3等級のうちの最下等の車両)に、弁当はにぎり飯であったという。

晩年は悠々自適の幸福な人生を送り、昭和16年(1941)太平洋戦争の始まる直前の4月2日、72才で歿した。

そして戦後、辻村農場は農地改革によって、全耕作者32戸に解放されたのである。辻村家の森のまえには、「辻村農場自作農創設記念碑」が建てられ、直四郎の功績をたたえるとともに、自作農創設を記念している。

・ 文 献

- 「岩見沢市史」
若林 功：「北海道開拓秘録」
若林 功：「北海道農業開拓秘録」
辻村もと子：「馬追原野」

[1981. 6. 15. 受稿]